



TITLE:

乳糜尿症に対する副腎皮質ホルモン製剤デカドロン(デキサメサゾン)の効果

AUTHOR(S):

森元, 譲一; 能中, 陽一

CITATION:

森元, 譲一 ...[et al]. 乳糜尿症に対する副腎皮質ホルモン製剤デカドロン(デキサメサゾン)の効果. 泌尿器科紀要 1959, 5(11): 1170-1172

ISSUE DATE:

1959-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/111854>

RIGHT:

乳糜尿症に対する副腎皮質ホルモン製剤 デカドロン(デキサメサゾン)の効果

北海道大学医学部泌尿器科教室 (主任 辻 一郎教授)

助 手 森 元 譲 一
大学院学生 能 中 陽 一

Effects of Adrenocortical Hormone, Decadron (Dexamethasone) on Chyluria

Joichi MORIMOTO and Yoichi NONAKA

From the Department of Urology, Hokkaido University Medical School, Sapporo, Japan

(Director : Prof. I. Tsuji)

Etiology and genesis of chyluria are of quite complexity and are not clarified yet at present. Various treatments have been tried on chyluria. None of them, however, are 100 per cent effective.

A case of chyluria in which oral administration of adrenocortical hormone, Decadron (Dexamethasone) produced remarkable improvement was reported. In this case, frequent provocative tests revealed negative Microfilaria, retrograde pyelography proved extrapelvic extravasation whereas routine medical and urological treatments were not effective at all.

乳糜尿症の原因及び発生機序は複雑で尙今日不明な点が多く、その治療は種々のものが提唱されているが何れも 100% に確実なものはない。

我々は最近数回の誘発で *Microfilaria* 陰性、逆行性腎盂撮影で腎盂外溢流像を認めたが、普通の内科的、泌尿器科的治療では全く効果のなかつた乳糜尿患者に、副腎皮質ホルモン製剤の内服を試みて著効を得た 1 例を経験したので報告する。

症 例

64才、農婦、初診、34年3月4日

出生地；富山県城花（幼児期に北海道に居住して以来、曾って *Filariasis* 流行地に居住乃至旅行したことがない）

主訴：尿濁濁、排尿困難。

家族歴：特記すべきことなし。

既往歴：生来健康だったが妊娠したことがなく、4年前より白内障に罹患。

現病歴：今年の2月初旬何ら誘因と思われるものなく、時々尿が白色乃至薄桃色に濁濁する様になり、2月15日突然尿閉を来たしたが、ミミズの様なものが排出された後自然排尿可能となつた。その後も尿濁濁が続き来院時迄時々排尿困難を来しているが、疼痛や発熱等はなかつた。

現症：眼瞼結膜は貧血性で栄養もやや不良であるが、胸腹部視触診上異状なく、表在性リンパ腺の腫脹も認められない。血圧は 120 ~ 80、赤沈は 1 時間値 96、2 時間値 116 で著明に亢進。

泌尿器科的所見

1) 触診所見：尿性器に特別な異常を認めない

2) 尿所見：一見して乳糜尿を思わせる様な桃色を帯びた乳白色度の濁濁尿で、放置すると寒天様凝塊物を形成する。蛋白(卅)で検鏡上脂肪球(+)、赤血球無数、白血球(+)、細菌(-) アルコールエーテルを加えて振盪すると濁濁の大部はエーテルアルコール層に移行消失した。

3) 膀胱鏡所見：左尿管口よりの濁濁した血尿の排出と三角部に浮遊性の血性凝塊を認めたが右尿管口か

らは全く清澄な尿の排出を認めた。

4) X線所見：排泄性腎盂撮影では両側共に機能形態正常で、逆行性腎盂撮影でも腎盂、尿管の形態はほぼ正常であるが、両側腎共にかなりの腎盂外溢流像を認める。

尚胸部X線写真にも異常は認められない

5) 腎機能検査：P.S.P. 試験は1時間値55%，2時間値20%，血液尿素窒素は20mg/dl

治療及び経過：以上の所見より乳糜尿症として逆行性に1000倍硝酸銀液の腎盂内強圧注入を3回施行したが効果なく、スパトニンを1日量0.45gより0.6g迄増量して総量5g内服させたが全く尿所見の改善を見なかつた。この間夜間耳採血によりMikrofiliriaの検出を2回、更にスチブナール誘発による検出を2回、ギムザ塗抹及び濃抹標本で行ったが、いずれも陰性であった。

そこで後述する様な根拠から副腎皮質ホルモン製剤デキサメサゾンを1日量3mgの割で内服させた所、既に2日目で尿は全く清澄となつたので漸次減量して維持量を0.5mgとして総量20mgで投薬を中止した。2ヵ月後に再び来院したがその後1回も尿濁濁を見ていないと。なお後述する様な理由から退院後もスパトニンの内服を続けさせた。

考 按

乳糜尿症は寄生性即ちFilariasisに基因するものと非寄生性によるものとに大別されている。非寄生性の病因としては、縦隔洞の腫瘍・結核・外傷等による胸管の閉塞の結果起る淋巴の鬱滞、或は腹部や骨盤内の外傷・腫瘍・結核・囊腫・Ganglion等による該部淋巴管の鬱滞や淋巴系の荒廢損傷があげられているが、更に過労・妊娠等も誘因としてあげられている。

しかしその発生機序は複雑で非寄生性によるものはもとよりFilariasisによるものでも實際どの様な機序で乳糜尿が発生するかの決定は難かしい。

乳糜尿の発生機序に関しては今迄多くの研究がなされているが、要するに何らかの機転で荒廢した淋巴管が腎盂腎杯内に破れると云うMarion, Ponfick等の説が従来一般に認められている様であり、本邦でも林、久米等は、組織学的検索及び逆行性腎盂撮影で腎盂外溢流像を認めることよりこの説を主張している。

一方片峰、田辺はFilariasis患者尿による抗原抗体反応から免疫アレルギー説を唱えており、岡元、楢原はFilariasisに於けるリンパ系及び血管系の変化はアレルギー性病変と一致すると主張している。又細上、尾辻等は、Filaria抽出液中に拡散因子を認めて重要視している。更に乳糜尿としばしば合併する線維素尿は他の炎症性疾患に於ても腎の透過性亢進ある際には出現するという人もあり、またSaunes Kahn, Gotze,等は腎上皮細胞の機能障害による血中脂肪の通過性亢進をその原因と考えている。

乳糜尿の診断は尿の分析から容易であるが鑑別すべきものとしては、磷中毒、糖尿病患者に現われる脂肪尿や強度の膿尿、磷酸尿等がある。

寄生性乳糜尿症の診断は他の症状として、精索、陰囊、下肢等に、淋巴管炎、淋巴腺炎が著明に現われたり、発熱や嗜眠性傾向等を示す場合には比較的容易であり、Microfilariaが証明されれば確實であるが、しかしMicrofilariaの陽性率は流行地に於ても乳糜尿症の15～50%（阿世知、児玉）にすぎず、又逆行性腎盂撮影による著明な腎盂外溢流像も診断上ある程度参考となるが、これも常に認められるとは限らない。

治療としては従来、キニーネ、砒素、スチブナール、ヘトラザン、バル、ペニシリン・トリコマイシン、等の投与や、腎盂内収斂剤注入がまず試みられ、之れで効のないときには腎被膜剝離術、腎周囲リンパ管遮断術、腎部レ線照射、更に一側腎機能高度障害のあるときは腎切除やむを得ぬという人すらもある。

最近杉村は上記の如き乳糜尿発生説を根拠として抗アレルギー作用、抗ヒアルロニダーゼ作用及び透過性抑制作用を有するブレドニソンの使用に着目して著効を得た一例を報告しており、我々も副腎皮質ホルモン製剤デキサメサゾンにより難治性の乳糜尿症の治療に成功を見たわけである。

ここで杉村の例はMicrofilariaは陰性であったが、数年前よりFilariasisに特有と思わ

れる熱発作をくり返していることより、Filariasis の後胎症とみなして乳糜尿管の消失を来してもブレドニソンが Filaria 自体を根治する迄には到底至らないことから、乳糜尿管消失後も根治的作用のあると思われるスパートンを継続的に使用したと云っている。

我々の症例ではやはり Mikrofilaria は証明されず又乳糜尿管以外には熱発作等 Filariasis を思わしめるものはなかつたが、Filariasis を否定する積極的根拠もないため、やはり乳糜尿管消失後もスパートンの内服を継続させたが今日迄再発を見なかつたものである。

結 語

普通の内科的、泌尿器科的治療では全く効果のなかつた乳糜尿管患者に副腎皮質ホルモン製剤デキサメサゾンを投与して著効を得た1例を報告した

参 考 文 献

- 1) 阿世知, 他・鹿児島医大紀要, **4**: 32, 昭28.
- 2) 天野, 他: 日泌会誌, **46**: 661, 昭30.
- 3) 青木: 日泌会誌, **46**: 659, 昭30.

- 4) 岡元: 鹿児島医大紀要, **4**: 30, 昭28.
- 5) 岡元: 日泌会誌, **45**: 256, 昭29.
- 6) 岡元: 日本医事新報, **1672**: 35, 昭31.
- 7) 尾辻: 鹿大医学雑誌, **8**: 951, 昭32.
- 8) 片蜂, 他・皮と泌, **17**: 176, 昭30.
- 9) 河内: 泌尿紀要, **1**: 207, 昭30.
- 10) 北村: 寄生虫学雑誌, **3**: 1, 1954.
- 11) 北村: 新薬と臨床, **3**: 611, 昭29.
- 12) 児玉: 皮と泌, **17**: 326, 昭30.
- 13) 佐藤: 鹿大医学雑誌, **8**: 760, 昭31.
- 14) Santiago-Stevenson, D., et. al.: J.A.M.A., **135**: 708, 1957.
- 15) 指宿: 鹿大医学雑誌, **8**: 959, 昭31.
- 16) 指宿: 鹿大医学雑誌, **8**: 99, 昭31.
- 17) 杉村: 泌尿紀要, **4**: 721, 昭33.
- 18) 田辺: 長崎医学会雑誌, **31**: 208, 昭31.
- 19) 亀甲: 日泌会誌, **45**: 256, 昭29.
- 20) 山村: 日泌会誌, **46**: 665, 昭30.
- 21) 山内: J. Urol., **54**: 318, 1945.
- 22) Lazarus, J.A., et. al.: J. Urol., **56**: 246, 1946.
- 23) Wood, A.H.: J. Urol., **21**: 109, 1929.